

研究成果

松王は、科研費の研究課題「科学における価値判断に関する教育プログラム構築」の最終年に当たり、その研究成果の一部を科学哲学国際会議（CLMPS, Helsinki）において発表した。1950年代のR. Rudner, R. Jefferyの論争に始まり、今日、H. Douglasの価値役割論を中心に整理が進められている「科学者における科学的判断と価値判断」の関係について、真理探究に密接に関わる認識的価値と、そうではない非認識的価値、という二分法では整理し切れない科学者主体の価値判断として、予防原則に根ざした判断がありうることを日本地震学会の最近の動向などに照らしつつ論じた。特に東日本大震災以降の日本の各学会の動向に明るくない各国の参加者に対して、新たな視点の可能性を示すと同時に、科研費研究課題である教育プログラム構築においても、必要な価値判断の詳細な分類を進めることができた。松王はほかに、AIC等のモデル選択理論を中心に、統計哲学の研究も進めている。とりわけ、ソーバーらによって問題提起されているAICと科学的实在論の関係について、彼らの議論の基礎にある種々の前提（AICとBICの比較の観点や、尤度主義との共通原理に関する前提など）について詳細に論じ、いくつかの問題点を浮き彫りにした（統計哲学研究会）。また松王は、昨年につき、研究倫理に関するサーベイも進めており、その成果を電力中央研究所における招待講演において発表している。その中で、最近ミシガン大学などで研究が進められている心理学的知見の応用、あるいはもともとビジネス倫理に関わるCresseyのトライアングル理論を研究不正に応用する考え方などについて、解釈を加えながら説明した。院生の研究成果は次のとおり。まず尾崎は、現在の研究テーマである「バークリ哲学における物理学」の研究成果として、バークリにおける空間構成の特徴を、同じく構成主義的な立場に立つE. マッハとの詳細な比較を通じて浮き彫りにした。特に空間的な「奥行き」に関して、マッハではこれを他の「大きさ」「形」とともに基本的な所与として関して、バークリは触覚、視覚を異質な感覚として注意深く区別しながらこれらの感覚から（順序としての時間を介して）構成されるものとして捉える。こうした空間構成の考え方はすでにライプニッツにその萌芽的アイデアがあるが、バークリのそれはより一層徹底していて、現在のライヘンバッハの空間構成論にかなり近い。それでいて、バークリはライヘンバッハの規約主義を採らない。こうした、マッハでもない、ライヘンバッハでもない空間構成の立場としてバークリが論じられたことはなく、哲学的にも、また物理学史的にも興味深い知見を付け加えた（CLMPS, Helsinkiで発表）。新納は、博士論文の一つの柱になる、看護倫理の原点に関する研究としてF. ナイチンゲールの倫理学的研究を進めた。ナイチンゲールの主要な著作物における倫理的言説に関する分析を詳細に行い、その特徴を整理するとともに（倫理的視点でのこうした大体的なテキスト分析はこれまで行われていない）、ナイチンゲールに対して従来の解釈にあるような徳倫理的解釈のみならず、功利主義的解釈も十分可能であることを示しだした。とりわけ、看護（ケア）における「管理」の側面をナイチンゲールが重視したことはこれまであまり注目されておらず、この分析は伝統的看護倫理を見直す一つの重要なきっかけを与えたと言える（新納はこの後、看護学の具体的なアノマリー解決のために、功利主義に根ざした看護倫理の構築を提案する予定である）。会場は哲学的因果論に関する研究を引き続き行っている。今年も、一元論（たとえばWoodward）、多元論（たとえばCartwright）を比較し、両者の争点に関する整理を進めている。今のところ、多元論的立場が有利であるとの見込みが得られている（科学基礎論学会で成果の一部を発表）。高橋はR. カルナップの初期の空間研究について詳しく調べ、形式的、物理的、直観的空間がそれぞれアプリオリな分析命題、アポステリオリな総合命題、アプリオリな総合命題に支配されるとするカルナップの基本的な主張がどの程度擁護できるかを、カルナップ以後の哲学的主張と比較しながら検討した（北海道哲学会他で発表）。本間は、アメリカの環境影響評価に関するプログラム‘CADDIS’における科学的立場に関して引き続き批判的な研究を行っている。CADDISが基礎を置くとする（主にパースの）プラグマティズムについて、その元々の哲学的主張とCADDISの方針が真に整合的なのかどうかを、パースの哲学を掘り起こしつつ検討を行った。今のところ、CADDISのプラグマティズムは、パース的なプラグマテ

イズムと言うより、パースとジェイムズの二つの主張（両者は必ずしも両立しない）を行き来するものであって、必ずしも（哲学的には）整合的だと言えない、との見方を本間はしている（北海道哲学会で発表）。小野田は引き続き一般相対性理論についての研究を進めており、アインシュタインの理論における「時空点」の意味について、哲学的な「実体説」「関係説」の双方の立場を整理する中で分析を進めている。